

終章



終章 自己点検・評価作業を終えて

平成14年5月30日、《平成14年度自己点検・評価の計画について》という議題のもとに第1回目の自己評価委員会を開催し、本学の総合的な、本格的な自己点検・評価作業に着手してから予定通り2ヶ年に渉る本学全教職員の努力が終了した。

報告書の作成に結集する総合的な全面的な自己点検評価作業は、本学としては、はじめての経験であったが、自己評価運営委員長として要の役を勤められた梅津尚志教授を中心に運営委員の方々、各部署の責任ある位置にあった教員、職員の方々、様々な形での支援を快くおつとめくださった本学全構成員に支えられて、今、この作業をひとまず終了したことを感謝したい。

顧みて自己点検評価作業の難しさは、まず第一に点検すべき評価対象をどれだけ正確にかつ深く把握し得ているかという所に存在する。自己の経験、自己の知り得ている枠内での対象の点検・評価は一つの貴重な真実でありつつ、逆に点検する自己をそこに閉ざす危険性をも秘めている。自己の経験、自己の知り得ている事柄をも大事にしつつ、それを超え出た調査に基づく客観的な視野の獲得を努めて志したが、その志がどこまで実現し得ているか、おおかたの評価、ご批判に委ねるしかない。また、難しさの第二点は、問題点を検出し、対処すべき改善策を記述するに際して、その改善策を記述者が決定的には記述し得ない点である。多くの問題点は変動する条件、状況を勘案しながら衆知を集めた討議の中でよりよい解決策が得られるであろうものも多く、歯切れのよい記述はかえって悪しき拘束を生みかねない危うさを伴う。本報告書に慎重な、あるいは歯切れの悪い表現が散見されるとすれば、記述者にそのような顧慮も働いていることを記しておきたい。

以上、二点、自己点検・評価作業を終えて、記述内容に関わる顧みての言を記したが、また、一方、この点検作業それ自体が、大学人としての大きな学びの場となったことも記しておきたい。この点検作業によって大学自体に関する知見を深めることとなったことはもとより、記述原稿の検討の過程で点検作業そのものに関する教示を得られたこと、大学の様々な場所でのそれぞれの見えにくい努力を知り得たこと等々、重い作業中にはいくつものきらめく光りがあった。繁忙を極める職務の中で、原稿執筆にご協力をいただいた教職員の方々、あわただしいデータの提出の要請に快く率爾に対応していただいた職員、研究室の助手のお一人、お一人にも、最後に委員会を代表して心より御礼を申し上げる。

自己点検・評価委員長（副学長）¹ 梶木 孝惟

¹ 平成16年3月当時